第6章

公共ホールのヒューマン・リソース

佐藤　望

公共ホールにおける「人」の問題

「結局は人です」。文化施設のヒアリング調査で事業責任者が異口同音に唱える言葉である。どのように立派な建築物がつくられても、それがどのように生かされるかは、そこにいる人の独創性とアイデア、さまざまなリソースをコーディネートする力にかかっている。

従来の公共ホール運営に関するさまざまな研究や提言書のなかで、人の重要性はあちらこちらで謳われている。1990年代以降アート・マネジメントというビジネス分野がひとつの職業技能の必要な専門分野として注目され始めて以来、アート・マネジメント業務を行う専門員の人材養成の問題は社会のなかで次第に注目を集めるようになった。そこでは、事業展開の実践ノウハウを行う人材の問題が中心であった。そして、公共ホールは日本のパフォーミング芸術提供の拠点であった事実にもかかわらず、これを巡るあらゆる階層におけるヒューマン・リソースの問題に関して、その理念づくり、組織運営、実行と評価という観点から、体系的に論じられることは少なかったようである。

しかし、ホールを支えるヒューマン・リソースは、マネジャーやプロデュー